

詩集

夜行便

詩集

夜行便

一九八七年 発行 三〇〇部限定

著者 立花 裕二

発行者 中川 修徳

発行所 書肆 たちばな

〒 四三二

静岡県静岡市中島一六八五

電話 ○五四二(八六) 六二〇六

装幀 (有)静岡田村製本所

定価 千二百円

詩集
夜行便

次

ロイヤルフラッシュ
.....
40

死の予言	44
山の公園で	46
夏の夜	50
夜の足音	54
魂	58
十二月の朝	62
二俣線	66
別所温泉	68
風	72
朝の停車場	74
あとがき	78

天 国

ちようちようが舞う お花畑のまん中に

天国へと登る十三階段があるのを

君達は知っているか

俺はあの世へ行こうと思っていたんだが

爺さんと婆さんが出てきて

俺の魂を持ててってくれると思っていたら

一番上の階段まで上りきれずに

また下まで降ろされたんだ

「おい爺さん 婆さん

なぜ俺を置いていくんだ

あの世とやらへ連れてってくれー」

と言って何度も呼んだんだが

きこえないのかどうか

あとをふり向きもしないで

とうとう行ってしまいやがった

賽 錢 箱

善男善女が社へとおまいりに来る

家内安全 交通安全 試験合格 縁結び 商
売繁盛

いろいろな事を願い賽銭箱にお金を入れる

一円 五円 十円 五十円 百円 五百円 千円

まれに一万円

金の乱舞

だが 神よ お前は人間を平等に作ったはず

ではなかったか

賽銭箱に入れる額によって

そんなにも願いに差が出るのか

賽銭箱よ

われわれが苦勞して働いた金を
どの位ほしいと願うのか

それとも

欲深い善男善女か 社の主か

今日もまた

賽銭箱を前にして金が飛ぶ

一円 五円 十円 五十円 百円 五百円

千円

まれに一万円

放浪

二、三行書きかけた詩が思いつかぬまま
「えーい」詩なんかめんどくせえー
と 夜の街へ飛び出していった

彩るネオンの中を歩きながら

映画館の前まで来ると

以前勤めていた友人とぼったり

「今から飲みに行くんだが ついて来ないか」

の言葉に誘われるままについて行けば

そこは公園の近くバー「プティ」

ソファアーに座り 彼女達がついでくれる

アルコールに酔い

心地よい気持ちでダンスを踊る

やがて彼女達がいなくなり

今度はマダムがやってきて

「ねえ 私こんなに燃えているのよ」

と本気とも思える言葉に

僕の手はマダムの乳房へと誘導されていた

うっとりとうかれていると

ベルが鳴り出し

マダムは時間外とばかり

僕から離れてガックリ

酔いも一度にさめる思いだった